

自身の経験も生かしてひとり親の相談にのる大野さん。「就職が決まってからも利用が続く人もいる。本人が『もう大丈夫』と思えるまで寄り添えたら」と話す(京都市南区・マザーズジョブカフェ)



働き方 私らしく

「女性活躍」の現場から

⑧ひとり親の一步

「あなたなら乗り換えられる。大丈夫」。10年前、相談に訪れた市役所で出会った母子自立支援員(当時)の言葉が今も忘れられない。「その時は信じられなかったんですけどね」。マザーズジョブカフェ(京都市南区)の京都府ひとり親家庭自立支援センター相談員大野通子さん(39)は今、あの時の支援員と同じようにひとり親になった女性の「活躍」を支えている。

「ひとり親になった人は、突然の出来事に戸惑い、現実を受け入れられないことが多いんです」。自身の経験も重なる。

出産を機に退職して育児に専念したが、長女が1歳になるころ体調に異変を感じて心療内科を受診した。「適応障害」と診断され実家で静養することになり、結婚生活も破綻した。「まさか自分が離

気持ちを支える伴走者に

「まさか」の離婚と経済的不安、就業につなげるため――

「あなたなら大丈夫」、心の回復待つ

婚するなんて」って気持ちでいっぱいですよ」。混乱のなか、経済的不安が容赦なく襲ってくる。「自分一人で子どもを育てることを考えたら恐ろしくて仕方なかった」

そんな時にかけてもらった「あなたなら大丈夫」。自分の立場を冷静に捉え、娘と2人で暮らしてゆくための仕事や住まいを考える一歩になったと思ふ。

昨年1年間の離婚件数は22万組以上。2011年度の全国母子世帯等調査などによると、母子世帯はこの25年間で1.5倍に増えた。子育てとの両立の難しさや就業に必要な知識や技能を習得する機会がなかったことなどから、非正規労働に就く人も多い。

一方、女性活躍推進法に基づき企業が策定する行動計画では、非正社員を正社員に登用する制度の整備を掲げる企業もある。自治体などの就職支援プログラムも充実してきた。だが、大野さんは「正社員への登用が進み、利用できる制度が増えるのはよいこと」としながらも「ひとり親の活躍を支えるなら、そういったハード面だけでなくソフト面の支援も大切では」と考える。

大野さんたちが5年以上支援を続けている母子がいる。元夫から受けたDV(ドメス

ひとり親世帯の状況。2011年度、全国母子世帯等調査によると、母子世帯になる前に不就業だった母親のうち69.1%が就業しており、このうちパート・アルバイトが57.4%で最多。就業や困り事の相談は、マザーズジョブカフェのほか左京区の京都市心ひとり親家庭支援センター(ゆめあす)でも行っている。

その後パート勤務に就き、ごく最近、子の大学進学を機に正社員となった。「頑張っとうと思えるようになるには時間がかかるし、まわりで支える人たちの存在も欠かせないと思う」

精神的な疲労と混乱で考えがまとまらない時、自立支援のための技能習得講座があっても踏み出せない人もいます。無理に就職しても途中で挫折するかもしれない。そんな時

にありがたいのは、揺れる気持ちを受け止めてもらいつつ、キャリアアップの作戦や時期を一緒に考えてくれる伴走者です。そう考える大野さん自身も、その時々で違う人に支えられながら少しずつステップアップしている。

離婚後、最初に就いた仕事は市役所の臨時職員だった。「親子2人が暮らせる給料ではなかった」と振り返る。今の職場も最初は非常勤でスタートしたが、常勤スタッフになったのを機に昇給も実現した。「ひとり親になったからこそ今の私がある。この経験はハンディではなく強みだと思っています」。後に続く女性にも、それぞれの「活躍」を見いだしてほしいと願う。